

— 植村直己の少年時代 — (2の2)

(4月号会報に続く)

(記 岡本)

高校卒業後は、豊岡市に本社のある新日本運輸会社の東京両国支店に約1年間勤務した。就職を勧めていた母梅が同社の人事課長をしていた知人に入社を頼んでいた経緯があったため、直己自身は大学進学を希望し大阪の関西大学に合格していたが、一旦進学を保留し就職したのだ。東京勤務は直己の希望であった。両国支店の寮でも受験勉強を続けて、翌年明治大学農産製造学科に進学した。農学部を選んだのは、実家が農家だからではなく受験者が少なく入り易かったからだというのが、謙遜からの韜晦かもしれない。長兄は大学進学を勧めていた。

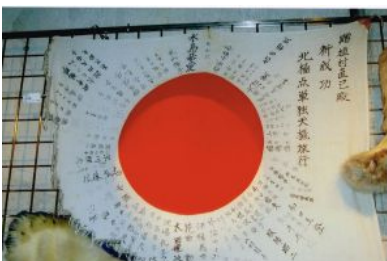
「大学生活を有意義に過ごすために大学のクラブ活動をやろうという気が起きた。文化サークルや音楽サークルに入れる才能はなし、運動部となるとみんな高校の時からバリバリやった連中ばかりでどこにも所属できそうな部がなかった。ガイダンスが始まろうという時にフト思いついたのが山岳部だ」という。駿河台校舎の山岳部部室を覗いたところ、上級生部員からズブの素人の方がその後の上達が早いとおだてられ、ペテンにかけられたようにして入部した。入部の3日後に白馬歓迎山行合宿に参加させられ、これが直己の人生の大転機となった。その後の足跡は直己が著した書籍で詳細に辿ることができる。

次に長兄修や同級生の直己月旦評はおおよそ次のようなものである。

(長兄) 直己は小さい頃どんな子供だったかとよく人から訊かれるが、学校では自由奔放であったが、特別印象に残るものではあまりない。つまり一般の子供と同じということである。自分の好きなことは一生懸命やった。小学生同級生の中でも臆病の方で大変恥ずかしがり屋の少年でもあった(注3)。高校時代そっと片思いにふけるが、直接話す勇気がなかったようだ。内気なところはどうすることも出来ず、しだいに単独行へと自分の道を探すようになった。目標を加藤文太郎におくようになった。

(小中学の同級生) とにかく平凡で地味で目立たなかった。学校の成績は中の上、良い方にも悪い方にも目立った子でなくて、どうにも説明のしようがない。いたずらはよくやったけど、それも大勢でわいわいやっているなかに植村もいたという程度で、とびぬけて悪さをしたというわけではない人です。牛の世話とか家族の炊事とか家の手伝いはよくやっていた。その他の時間はいつも一緒に遊んでいたはずなのに不思議にこれという印象がない。

実は私の従兄は高校で直己の一学年下で2年間重なっていたが、直己の名前は冒険歴がマスコミに報じられてから知った由である。



登山家、冒険家には少年時代から山に親しみ、大学では山岳部、冒険部などそれらしき部に在籍していた者が多いと思われるが、直己の少年時代は、山と縁がなく、臆病で内気な海外に行くことを夢見ていた並のイタズラ小僧だったとみられる。とすれば、第二、第三の直己はそこら中に居そうであるがそうではない。では、ということなのだろうか。

2016年6月に豊岡市の「植村直己冒険館」で図らずも手にしたピラに示唆があるかも知れないと思った。「僕らが子供の頃目に映る世界は新鮮ですべてが新しかった。やりたい事は何でもできた。ところが、年をとってくると疲れてくるし、人々はあきらめ、みんな落ち着いてしまう。世界の美しさを見ようとしなくなってしまう。大部分の人は夢を失っていくんだよ。でも、僕はいつまでも子どもの心を失わずにこの世を生きようと思う。…」(1983年「ミネソタ・アウトワード・バウンドスクール」にて、植村直己42才)。

子どもの頃の夢、外国に行ってみたいということ諦めない、浮世離れした純真無垢な魂の持ち主であった直己は、明大山岳部で冒険の礎を培い卒業と同時に「世界の美しさ」をみようとアルバイトで貯めた4万円(当時約110ドル)を手に海外に飛翔していったのだ。慈父のように直己を見守り、直己からは父親のように甘えられ頼り切られていた長兄修でさえ「それにしても、直己はどうしてあのような想像を絶する苦難と危険にみちた冒険の一生を送ったのでしょうか」と自問している。第三者には詮索の余地はなく、唯沈黙のみか。

(了)

(注3) 植村直己は、冒険家になるために必要な資質は何かと尋ねられて、少し考えて「臆病であることで」と答えている。

参考資料

- (1) 「青春を山に賭けて」 植村直己著 文春文庫(2008年7月刊)
- (2) 「植村直己・夢の軌跡」 湯川豊著 文春文庫(2017年1月刊)
- (3) 「弟・植村直己」 植村修著 編集工房ノア(1999年4月刊)
- (4) 「極北に消ゆ、植村直己捜索報告書・追悼集」 明治大学山岳部炉辺会編(2000年5月刊)
- (5) 「少年植村直己」 太田誠著 北斗舎(1986年5月刊)
- (6) 「植村直己の故郷訪問」 東京アルコウ会会報 2018年2月号(ホームページ随想欄(14))